

# 自分史（MY 様）

作成日：令和 3 年 6 月

私は昭和 8 年 10 月 4 日に当時日本領だった朝鮮の京城府で生まれた。父は軍人、母は専業主婦、兄妹は 2 つ年上の兄と 1 つ年下の妹だった。父は職業軍人だったため、転勤が多く、私たち家族も何度か一緒に引っ越しをした。

私が生まれた京城の家は官舎だったがとても広いお屋敷だった。お庭には栗の木が 30 本位植わっていて秋になると栗拾いをするのがとても楽しかった。栗は焼いたり蒸したりして食べた。父には当番兵というお付きの軍人が付いており、毎朝その人が父の馬を家まで引いてきた。引いてこられた馬は家の柵につながれていたが、馬はとても大きく、排泄も豪快だった。その馬に人参を食べさせるのも楽しかった。兄妹 3 人で人参を 2 本ずつくらい食べさせたが、とても美味しそうに食べていた。当番兵の人がよく遊んでくれたのも楽しい思い出として心に残っている。

その後小学校 1 年生の時に千葉県の上野に引っ越した。しかし、上野には 3 ヶ月ほどしか住まず、また朝鮮に戻った。今度は朝鮮の平城だった。平城でも官舎に住み、若松小学校という日本人学校に通った。平城の家の庭にはコスモスがたくさん咲いていて秋にはコスモスの中、赤とんぼを追いかけて遊んだ。転校を繰り返すのはあまり好きではなかったが、こんなことを言うと自慢のようだが、私たち兄妹 3 人は転校慣れなのか、どこの土地でも転校した翌期には兄妹全員が級長になったので学校の中ですぐに有名になった。前回の京城の官舎と同じく周りは日本人ばかり、学校も日本人学校だったので、朝鮮語は殆ど話さず、今はほぼ覚えていない。

朝鮮は日本と比べてとても寒かった。冬には校庭に水を張って凍らせ、スケートリンクにしてスケートを遊んだ。大同江という東京で言うと隅田川のような大きな川が近くを流れていたが、その川も冬には凍り、向こう岸まで歩いて渡ることができた。春になると少しずつ氷は解け始め、氷が割れて川を渡っている人が途中で川に落ちるのを何度か見たことがある。

戦争は小学校 1 年生の時から始まっていた。父は殆ど戦地において、私が 5 才の頃に支那に向かう父を踏切の所まで行って手を振って見送ったのを覚えている。父の戦地はジャワやラウバルだったそうで、終戦時はラウバルにいたそうだ。高射砲を担当していて、終戦間近はもう弾が一発も無くなって避難していたと聞いた。

父を除く私たち家族は私が小学校 4 年の時に岡山に戻ってきていて、終戦は父の実家のある岡山県瀬戸町の疎開先で迎えた。玉音放送は祖父と母と私の 3 人で聞いた。雑音が酷くて何を言っているのかわからなかったが、負けたんだということは分かった。「これからどうなるの」と母に聞いたら、「分からないわ」と母が答えたのを覚えている。真夏のとても暑い日だった。もう戦争が無くなるということでほっとしたが、同時に父のことが心配だ

った。終戦の翌年、父は引き揚げ船で無事に帰って来る事が出来た。

父が帰国した時はまだ瀬戸町にいた。帰国した父には良い仕事がなく生活はとても厳しかった。父は家の近所の製材所の仕事をしたり、近所の手伝いをしたりして生活費を稼いでいた。岡山の小学校に戦争体験を話す講演に行ったりもしていたようだ。その後岡山の母の実家に引っ越した。岡山での父は製菓工場の倉庫や井草で履物を作るような会社で働いていた。製菓工場の際は時折お菓子を持って帰ってくれたので嬉しかったが、生活は厳しいままだった。父のような職業軍人は「公職追放」というひどい扱いを受け、良い働き先がなかった。徴兵されて戦地に向かった軍人と違って、職業軍人の戦後の生活は厳しかった。私は戦時中はお姫様扱いだったが戦後は本当に貧乏だった。

岡山への引っ越しに伴って、私は岡山県立瀬戸女学校から岡山県立第一女学校に転校した。その女学校の3年生の時に日本の学校制度が変わり、受験することなく操山高校へ入学することになった。それから岡山大学に入学することになるのだが、家が貧しいため私は大学には行けないと思っていた。勉強をしていたら「お金がないのに大学に行くつもりか」と怒られそうだったので隠れて勉強していた。勉強がしたいのではなく、音楽がしたいので岡山大学に入りたかった。当時の岡山には音楽関係の大学は無く、音楽が学べるのは岡山大学教育学部の音楽コースだけだったのでどうしてもそこに入りたかった。

小さい頃から音楽は好きだった。京城にいる頃はピアノを習いたくてピアノを買いに行ったこともあった。しかし、戦時中でピアノは売ってなく、買えなかった。結局ピアノを習えたのは大学生になってからだったのであまり上手になれなかった。

母はとても音痴で音楽には興味はなさそうだったが、父は音楽が好きでバイオリンを弾いていた。家には蓄音機とレコードが何枚かあり、よくそれを聞いていた。ベートーベンのムーンライトソナタ、ブラームス、関種子や四家史子の歌曲などだった。これらのレコードは何度も聞いたし、ラジオから流れてくる音楽にも心が躍った。

岡山大学に合格した時はとても嬉しかった。両親、兄妹もとても喜んでくれた。父なんかは「これからの時代は女性も大学進学だな」なんて言いながら嬉しそうだった。学生生活も楽しかった。学費の支払いが大変だったが、家庭教師や岡山で有名なカバヤ食品などでアルバイトをして稼いだ。今でも関係の続いている友達もいる。一人は亡くなり、もう一人も私と同じように体が昔の様に動かなくなっているようで残念だが、元気な時は毎年会っていた。

私は教員になりたいとは思っていなかったが、教育学部だったし、教員になって4年働けば返済不要になる「教育奨学金」ももらっていたので教員になった。たまたま4年働いたところでお見合いをして結婚することになったので教員は辞めた。

夫は、岡山出身の農林水産省の技官だった。勤務地は東京だったので、結婚してからは私も東京の目黒区月光町に引っ越した。月光町には3年くらい住んだが、息子が生まれ多摩平の公団住宅に引っ越した。その後、多摩の浅川に引っ越したが、その時に思い出に残る良い出来事があった。浅川には農林水産省の出先機関があったのだが、ある日、そこに皇太

子ご夫妻が来られた。私は息子と一緒にご夫妻に会いに行ったのだが、息子がなぜか「ワー」と泣き始めた。たまたま美智子様のお近くだったので、美智子様がお気づきになり、息子の頭を撫でて下さった。息子は「美智子様に頭を撫でられた子」として有名になった。私も嬉しかった。浅川の宿舎は、裏には山があり、近くに川が流れ、自然豊かなとても良い所だった。

それからしばらくして目黒の官舎に空きが出たので目黒区下目黒に引っ越した。官舎は農林水産省が管理する今の「林試の森」という大きな公園の中にあった。息子が中学生の頃までこの官舎にいたが、森の中のような場所で自転車を乗り回しとても恵まれた環境だった。しかし、ここでは悲しいこともあった。

主人が心臓発作（大動脈破裂）で亡くなった。お昼休みにみんなでバトミントンをしている最中だったそうだ。職場の人から連絡を受け、すぐに駆け付けた。職場の人が救急車も呼んでくれた。しかし、全ては手遅れだった。夫は42歳、私は39歳、息子は中学2年生だった。私は「もう心の底から笑うことはないんだろうな」と思ったし、息子もとても悲しかった。しかし、息子は「お母さん、これからは2人で生きていこう」と力強く言ってくれ、息子の中学校の担任の先生も「H君なら大丈夫ですよ。H君を信じてついていけば間違いないですよ」と言ってくれた。息子の力強いサポートもあり、もう笑えないと思っていた気持ちも少しずつ明るくなり、何年かするとまた心から笑えるようになっていた。

夫の人柄や行いが良かったため、周りの人がとてもよく助けてくれた。林業試験場での職も探してくれた。とても有難かった。しかし、ずっと目黒の官舎にいることはできず、江戸川区の小岩に小さなマンションを買って息子と引っ越した。小岩では小森コーポレーションという印刷機械を作る会社で働いた。当初「40歳まで」という募集条件の職員募集に応募した。私は40歳を超えていたのでダメかなあと思って面接に行ったが、その場で合格にさせていただき10年くらい勤めた。

小岩での生活では、息子が東京大学に合格したり、司法試験に合格したり、嬉しいことはたくさんあった。息子は幼稚園の頃からIQが高く、幼稚園の先生は「H君ならきっとどんな学校でも行けますよ」と言ってくれていた。しかし、実際東京大学に合格した時は本当に嬉しかった。私が岡山大学に合格した時の次に嬉しかったと思う。息子は早稲田大学も合格しており、早稲田の入学金（18万円）の支払い日は東京大学の合格発表の前日だった。東京大学に合格したら無駄になるお金だが、息子に支払いをするようにお金を預けて仕事に行った。しかし、仕事から帰ってくると息子が「やっぱり早稲田には行きたくないの、入学金は納めなかったよ。その代わりこの入学金を僕に頂戴」と言った。その時は、東京大学に受かるのか心配だったが、合格してよかった。今となっては笑い話だが、これからはお金はかかるので、その18万円は息子にはあげなかった。

息子が司法試験に合格した頃、私は潰瘍性大腸炎を患った。下痢から始まり、関節や目の痛みなどの合併症も伴った。下痢は特にひどく、1日に10回くらい血便が出た。その頃、息子は自動車免許を取っていて、中古の車も買ってあげていたの、よく車で慈恵医大

までの送迎をしてくれた。痛く、体調の悪い中だったのでとても助かった。結局、手術をすることなく、入院して薬で治したが、今日まで再発はなく、良かったと思う。

私は 39 歳から 60 歳までずっと独身だったが、60 歳の時に再婚した。コーラスが好きだったので、恵比寿にある日本合唱協会アマチュア合唱団に参加していたのだが、ある日、今の主人がその合唱団に入団してきた。入団してきたときは「こういう人が入ってきたんだ」くらいで特に何も思わなかったのだが、最終的には 60 歳で彼と再婚することになった。

主人とは趣味があったので楽しく過ごせた。コーラスもそうだが、二人ともボーリングと旅行も好きだった。ボーリングは、芝ボウルや品川プリンスボウルなどに二人で週に 3 回くらい行き、リーグ戦やトーナメントにも出場していた。私のボーリングでのベストスコアは 258、主人は 299 だった。アジアナ航空のボーリング大会では日本代表になり、アメリカ、中国、韓国、台湾、日本の代表で行われる国際大会に 2 度参加した。私が参加した国際大会は 2 回で、韓国と台湾で行われた。アジアナ航空の大会だったので大会出場者はチケット代が無料だったので気分が良かった。夫婦での旅行は、韓国、ハワイ、上海、タイ、ドイツ、オーストラリア、台湾などに行って楽しかった。

私は、再婚できて本当に良かったと思っている。やはり一人でずっと過ごすのは寂しいし大変だったと思う。いまの主人はとても優しくいい人だ。こういう人に知り合えて一緒に過ごせて、私は人生でやり残したことはないと思っている。

#### <若い人へのメッセージ>

若い人には大きな夢を持って、自由に羽ばたいて欲しいと思っている。ただ、思いやりの気持ちを大切にしてもらいたいし、他人に迷惑をかけることは絶対に良くないと思う。若い人には想像力豊かに生活をしてほしい。「これをしたら自分がどうなるか、相手がどう思うか」、一人一人がこういった想像力を持って他人に迷惑をかけることなく生活すれば少しずつ世の中は良くなっていくのではないかと思う。